

## 河船の旅

野瀬 隆平

中世の面影を残すドイツの街、レーゲンスブルクを散策して船に戻ってきた。熱いシャワーを浴びて、ほっと一息入れる。部屋は狭いながら清潔で居心地は悪くない。窓の外を見ると船は川面を滑るように動きだしていた。

船客がラウンジに集う時間だ。さっぱりとした服装に着替え、ラウンジに向かう。カラフルなシャツを着込んだ人たちが、カクテルを飲みながらくつろいでいる。バーのカウンターに腰掛けると、「ジントニックですね」とバーテンダーが声を掛けてくる。いつも同じものを頼むので憶えてしまったようだ。ゴクリと一杯、冷たい酒が身体に染みわたる。アルコールが回り始めた頃、一階下にある食堂へと移動する。

六人がけのテーブルはどこに座ってもよいので、毎晩同じ顔ぶれと同席するとは限らない。アメリカ人の他、カナダ、オーストラリア、イスラエルからの人たちもいる。

食事をしていると、窓の外が急に暗くなり始めた。船が「ロック」に入ったのだ。今回の河舟の旅は、ライン川からマイン川へ、そして運河を経由してドナウ川へと入る。水位に差があり、一番高いところでは海拔 400m にも達する。その高低差を調節するのがロック（閘門）である。乗船したアムステルダムから目的地であるウィーンまで、なんと 67 ものロックを通過する。

水位の差が大きなロックは 25m にも達するので、船が入ると両舷とも遥か上までコンクリートの壁が迫ってきて、船の中は真っ暗になる。

夕食も終わり、大きくなった腹をさすりながら船室に戻る。そのまま寝転びたいところだが体に良くない。デスクに向かいデジカメで撮った写真を整理する。データを持参してきたパソコンに移さないと直ぐ一杯になってしまうからだ。

昼間目にした風景を思い起こしながらなので楽しい。整理を終え腹もおさまってきた。船窓のカーテンを開けて外を覗くと、ほのかに明るい空を背景に川沿いの民家の黄色い灯りが、船尾のほうに流れ去る。それを見届けて、ベッドにもぐり込んだ。